



Itoh Laboratory,
Ochanomizu University

フルオープンアクセスかつペーパーレスな 学会誌・論文誌の発展に向けて ～芸術科学会での事例～

伊藤貴之

お茶の水女子大学 理学部情報科学科 教授

研究・イノベーション学会 第36回年次学術大会
企画セッション「挑戦する日本の学術誌」

2021年10月29日

itot@is.ocha.ac.jp <http://itolab.is.ocha.ac.jp/>

講演者の経歴



Itoh Laboratory,
Ochanomizu University

- 1992年 早稲田大学大学院 理工学研究科修士課程修了
- 1992年 日本IBM東京基礎研究所研究員
- 1997年 早稲田大学にて博士(工学)
- 2003年 京都大学COE研究員(助教授相当)兼職

- 2005年 お茶の水女子大学 理学部情報科学科 助教授
- 2011年 同大学教授
- 2019年 同大学文理融合AI・データサイエンスセンター長

- 専門: 計算機科学
 - 情報可視化、インタラクション、CG、音楽情報処理、データサイエンス、機械学習支援など

- デジタル作品およびそのための技術（CG, 画像, 音声...）を主とする学会
 - もともとはCGの作品と技術を扱う会議NICOGRAPHの母体
 - 理系だけど「卒業論文」より「卒業制作」という大学、芸術系だけどデジタル作品が主流な大学などを対象に含む
 - 名前はやたら大きいけど会員数は400～500人程度
(なぜこのような大きな学会名なのか講演者も背景を知らず...)
- 2001年創立 → 2013年法人化 & 日本学術会議登録
- 主な活動
 - オンライン学会誌 & 論文誌の出版
 - 年2回の主要な研究集会（英語 & 日本語1回ずつ）



- 1992年 早稲田大学大学院 理工学研究科修士課程修了
- 1992年 日本IBM東京基礎研究所研究員
- 1997年 早稲田大学にて博士(工学)

- 2003年 京都大学COE研究員(助教授相当)兼職
- 2005年 お茶の水女子大学 理学部情報科学科 助教授
- 2011年 同大学教授

- 2019年 同大学文理融合AI・データサイエンスセンター長



- 1992年 早稲田大学大学院 理工学研究科修士課程修了
- 1992年 日本IBM東京基礎研究所研究員
- 1997年 早稲田大学にて博士(工学)

2001年の学会創立直後に複数の先輩から声がかかり
初代論文誌委員長となり創刊をリードする
同時に創刊した学会誌の編集にも携わる

- 2003年 京都大学COE研究員(助教授相当)兼職
- 2005年 お茶の水女子大学 理学部情報科学科 助教授
- 2011年 同大学教授

事務局代表として2013年の学会法人化をリードする
2014年から2年間会長を務める

- 2019年 同大学文理融合AI・データサイエンスセンター長

フルオープン論文誌



Itoh Laboratory,
Ochanomizu University

- 2002年の創刊当初からHTML形式で出版
 - 論文本体は当初からPDFファイル
(動画などの付録掲載を推奨)
- アクセス制御は一切なし(誰でも閲覧できる)
- 紙冊子の出版は一切なし
 - 著者には希望者に限り別刷を有料発行
- 1年分の論文をCDに焼いていた
 - 国立図書館に送付
 - 希望者に有償販売
 - 国立図書館の自動収集システム導入にともない廃止
- 著作権は著者が保持



芸術科学会論文誌

The Journal of the Society for Art and Science
ISSN 1347-2267

お知らせ Announces

- 2008年からPDF形式で出版
 - 研究集会の開催報告、論文の紹介など
 - 学術および産業に関する特集記事
 - 会員投稿作品の紹介
- アクセス制御は一切なし(誰でも閲覧できる)
- 紙冊子の出版は一切なし
- 著作権は著者が保持

※2008年以前は学会誌を一般書籍として書店販売(会員には無料送付)していた



当該研究分野の特殊な現象



Itoh Laboratory,
Ochanomizu University

- 主役は動画や音声
 - まずビデオで研究概要を見たあとに論文を読む、
という勉強方法が一般的
- カンファレンス重視
 - 口頭発表や展示が本番と考える人が多い
 - 学術誌での出版は「後処理」という風潮
- 研究の進化が極めて高速
 - 対面での査読プロセス・紙での出版を待ってられない
- これらの事情が論文のオンライン化を加速してきた

なぜペーパーレス、なぜフルオープン



Itoh Laboratory,
Ochanomizu University

※学会の総意ではなく講演者の私見です

もちろんペーパーレス

- デジタル作品の学会
 - 紙より画面で見てほしい
 - 自分で操作してほしい
- 運営経費の劇的削減
 - 冊子保管の場所が不要
 - 郵送料が不要
 - 事務局員の通勤が不要

もちろんフルオープン

- 読者増が何よりも大事
- 購読収入が必要ない
 - 事務経費が安いので
- 著作権を著者に残したい
 - 作品出展などを旨す
 - 著者の不便を避けたい

当該分野に国内学術誌って必要なの？



Itoh Laboratory,
Ochanomizu University

- **国内学会よりも国際学会を主戦場にする人も多い**
 - 日本人だけでなく海外の有名研究者に読まれたい
 - 研究者評価も組織評価も国際論文が重視される
 - 講演者に限っていえばもともと国際共著論文が多い
(研究室学生も短期留学先の研究者との共著が多かった)
- **当該学会も国際出版をしている**
 - 予稿集の一つを IEEE Digital Library から出版
- **日本の学会には「集会」を求めている**
 - 計算機科学は世界的にカンファレンス重視主義
 - デジタル作品は「展示してなんぼ」「触れてなんぼ」が多い
- **では国内出版の学術誌は何を目的にすればよい？**

国内学術誌＝裾野を拡げる役割



Itoh Laboratory,
Ochanomizu University

※学会の総意ではなく講演者の私見です

- 読者層の裾野を拡げる
 - 高校生や学部生、専門職に就かない人
 - 日本語・ペーパーレス・フルオープンだからこそ容易に実現
- 投稿者層の裾野を拡げる
 - 学部卒で就職する学生
 - 非研究職の企業人
- 伝統的な学術誌に投稿しにくい研究成果を受け付ける
 - 例えば「文章よりも作品で伝える」研究

- 学術研究の講読や投稿によってキャリアアップする経験を研究者以外の多様な人に拡げることを目指す
- 国内の業界事情にあわせて学術誌をバージョンアップする

国内学術誌に関する講演者の願望



Itoh Laboratory,
Ochanomizu University

※学会の総意ではなく講演者の私見です

- 伝統的な国際誌にできることは国際誌にまかせる
- 国内での事情やニーズに寄り添う
 - 日本語であり続ける必然性のある分野？
 - 日本の研究教育機関に特有の事情への整合？
- 学問に携わる人の裾野を広げる
- 斬新・実験的・振り切った取り組み

講演者の分野で実現できそうなワイルドアイデアの例:

- 学会誌の一部をYouTubeチャンネルやVR空間にする
- 論文の書式をPowerPointやIllustratorで作る
- 学会公認のプレプリントを先に出版して後から査読をする

※全くの個人的な妄想です